



|              |                                                                                     |
|--------------|-------------------------------------------------------------------------------------|
| Title        | 太宰治『斜陽』研究史：一九九〇年代～                                                                  |
| Author(s)    | 吉岡，真緒                                                                               |
| Citation     | 太宰治スタディーズ. 2006, 1, p. 18-19                                                        |
| Version Type | VoR                                                                                 |
| URL          | <a href="https://hdl.handle.net/11094/97254">https://hdl.handle.net/11094/97254</a> |
| rights       |                                                                                     |
| Note         |                                                                                     |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

没後五十年の一九九八年を含むこの期間は、研究の基盤となる書が多数刊行された。一九九八年十月に公開された「斜陽」草稿四十二枚の翻刻が第十次『太宰治全集』（98・5～99・5）に収められた意味は大きい。「斜陽」草稿については、安藤宏「文献学の中の太宰治」（『国文学』99・6）が「完成稿を書き継ぐ過程で平行して派生した反古」であることを、用紙、ペン色、ノンブル等から推定し、「恋と革命」のキーワードを作者が獲得していく事情を明らかにしている。

また「斜陽」の下敷きである太田静子の日記を活字化した『斜陽日記』（48・10、石狩書房）が、文庫版で一九九八年六月に小学館より五十年ぶりに復刊されたことは、本作品が、作品そのものはもちろん、成立事情も読者の興味をひく作品でありつづけていることを裏付けていよう。同書に収録されている小森陽一「解説」には「近代家父長的な家族観と結婚観から脱け出そうとした一人の女性の精神の記録」を太宰が敗戦後の思想的な転換期に重ねることによって、道徳革命を目指す「斜陽」のかず子を造形したという「斜陽」と「斜陽日記」の関係性を考えるうえで重要な指摘がなされている。「斜陽日記」に言及した論文では他に相馬正一「『斜陽日記』のオリジナリティー」（『国文学』99・6）が示唆的である。

作品にまつわる資料が充実する中で、作品研究も新たな視点が導入され、ピークにさしかかっている。キーワードの「滅び」と「道徳革命」は、作品内でその内実が明かされないこと、また「太宰治」を想起させる登場人物のあり様とから、太宰神話あるいは論者の倫理観からその内実を問い、意味づけることが多かったといえよう。そうしたあり方に一石を投じたのが、高田知波「『斜陽』論」（『国文学』91・4）である。高田は「斜陽」全八章が、線的な時間に沿って配列された八つのブロックとして捉えることを前提に、各章がいつ書かれたかを推定し、各章を語る（書く）語り手かず子の《出来事》の場における体験と『語り』の場における執筆行為」とが相互に作用し合ったのが、かず子の手記であるとし、「革命」の内実ではなく、自己表現としての「革命」という言葉を手に入れた点を重視し、語るかず子の変貌を跡づけた。高田の論は、語りに言及した重要な論文であるが、かず子の語りを、かず子が主体の手記に限定したことと「斜陽」の構成を考えるうえで新たな問題提起をした。すなわち「斜陽」は、かず子が主体の手記と直治が主体の手記によって成立しており、これらを配列し「斜陽」とする主体はどう捉えるのかという問

1960

1950

1940

題である。島村輝〔エクリチュール「書くこと」〕への意志」(『太宰治』92・6、洋々社)は、「斜陽」を、かず子が何度もの手記の写し取りと意味づけの痕跡を残しながらまとめあげた物語と指摘する。同様な視点で榊原理智「語る行為の小説」(『日本文学』97・3)も「発話された瞬間に過去であることが明らかに」語りのあり様を指摘し、「斜陽」を、無数の基準が交錯する言説の断片の重なりと論じた。島村・榊原の提示した語りの局面性は重視すべきだが、局面性を強調することは、物語内容との乖離につながる。その点を克服したのが中村三春「『斜陽』のデカダンスと『革命』」(『国文学』99・6)であろう。「斜陽」を構成する手記形式のエクリチュールはそれじたいで充足することはなく、文芸テクストとしての全体性へと吸収されざるをえない」と明確に指摘した中村は、あるコミュニティを否定し、別のコミュニティを打ち立てる語り口を、太宰の女語りを視野に入れつつ明らかにした。

また「斜陽」が有する同時代性、思想性から、安藤宏「太宰治における『滅びの力学』」(『解釈と鑑賞』01・4)は「斜陽」の特異性を「マルクス主義的世界観における『階級』の問題と、戦時の運命共同体的な『国体』の観念とが、共に『滅亡』というテーマのもとに重ね合わされている」ところに見出しており、山崎正純は「『斜陽』」(『国文学』02・12)で、戦後の太宰と河上徹太郎の類似を「思想として誤りであっても、『正しい』への便乗よりは、誤りを持続させる愚かさの方が、より『正しい』のだ」とする思想性に見出し、かず子を戦後からの連続の相で捉えた。また根岸泰子「太宰治『斜陽』」(『20世紀のベストセラーを読み解く』01・3、学芸書林)は、本作品が当時もたらした衝撃について、同時代性、「相模曾我日記」との関係とから論じており興味深い。

他に、石井洋二郎「闘争する身体」(『身体小説論』98・12、藤原書店)が「身体」を軸にかず子の革命について不良の身体の種類を宿すことで自らの身体の階級性を白紙還元するものという示唆的な指摘をしている。